

令和 4 年 6 月 15 日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K01040

研究課題名(和文) 元朝による中国統治組織の地域比較研究 地方都市制度・監察制度を中心に

研究課題名(英文) A Comparative Study on Local City Administration and Inspection Systems in Yuan China

研究代表者

櫻井 智美 (SAKURAI, SATOMI)

明治大学・文学部・専任准教授

研究者番号：40386412

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：メンバーがこれまで進めてきた石刻研究による基礎データと、急速に整備が進む中国古典資料のデータベースや『全文』を利用し、元代の地方監察制度について具体事例の検討を行い、南北(江南と華北)におけるその概要の相違を比較検討した。監察官が地方巡察に伴って行う祭祀活動・社会活動や、地方の教育・リクルートに対する監察官の具体的な取り組みが明らかになった。また、監察官には華北出身者が就任する割合が高い点から、官吏任用で科挙が相対化した元代において、地方監察制度が果たした役割の大きさや、その中国制度史上の重要性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀末から今世紀にかけて、モンゴル帝国史の世界史上の意義が強調され、その影響の下、中国史上の元朝史に対するの見方も大きく変化した。本研究では、監察制度・都市制度に関して、新たに石刻資料を加えて検討し、看過されがちであった制度の具体的な運用状況や南北の相違を明らかにした。

また、海外との研究交流を見据えて日本における元朝史研究のベースを作る目的で、「元朝史研究会」を開催したほか、日本における元朝史の最新研究をまとめた『元朝の歴史 モンゴル帝国期の東ユーラシア』を編集・出版した。

研究成果の概要(英文)： This research project has examined specific cases of the local inspection systems of the Yuan dynasty, using basic data collected from inscriptions and stone monuments, databases of classical Chinese materials, and the "Quan Yuan Wen", and had compared differences of status of implementation in the North and South of China (Jiangnan and North China).

This study clarified the ritual and social activities of inspectors of the Yuan-dynasty office of Surveillance Commission as well as their specific efforts to educate and recruit in the regions. In addition, the high percentage of inspectors were appointed from northern China. This fact points to the significant role of the local inspector system and its importance in the history of the Chinese governmental system during the Yuan dynasty.

研究分野：中国宋元史、モンゴル帝国史

キーワード：元朝 元代 地方都市 都市制度 監察制度

## 1. 研究開始当初の背景

20世紀末、杉山正明らによってモンゴル帝国の世界史上の意義が盛んに喧伝され、21世紀に入ってから、白石典之らにより、モンゴル高原における初期モンゴル帝国をめぐる諸問題について、新たな見解が次々と表明された。帝国内の東西交流についても、経済面・文化面から盛んに研究が行われている。このように、帝国の施策やその方向性については研究が続けられる一方で、かつて盛んに議論された当時における中国地方社会の様相という「普通の」人々の営みと彼らを統治する地方組織については、近年正面から議論されることがなかった。しかし、統治組織の解明無くして、地方社会云々を歴史的に論ずることは不可能である。中国制度史の中で、あるいは、地方社会史の中で、モンゴル帝国時代・元代が占める地位や役割はどのようなものだったのだろうか。そして、地方組織は、元代以前に存在した支配王朝の違いなど歴史的経緯の差異によって、地域ごとにどのように異なる様相を示したのだろうか。このような疑問が本研究の問題意識の起点となった。

10世紀に唐が滅亡して以降、13世紀に元が中国の南北を統一するまで、ユーラシアの東方には大小多くの王朝が興亡した。この間、宋・遼・西夏・金という異なる王朝の支配下で、様々な異なる行政制度が採用・運用された。元はそれらの制度をどのように継承したのか。南北に差はあるのか。そして、元の制度はどのように明に引き継がれ、また影響を与えたのか。このような朝代を越えた制度の関係性は十分には明らかになっていなかったと言える。

近年の研究状況を見ると、中国では歴史研究のための大規模な資料整理が進み、古典籍のデジタルデータベースが整備されただけでなく、根本資料たる正史の新たな注釈が企画・公刊されている。台湾ではアメリカのアジア史学界の影響を受けつつ、西欧の社会学的分析が導入され、特色のある研究が進展している。これらの影響で、元代についても、国外では若手研究者の増加が見られ、新視角からの研究が生み出されている。しかしながら、資料の急激な増加の中で、基礎的な地方行政や都市制度の研究は、等閑視されている感が否めない。テキストデータベースの利用が簡易に行える環境の中で、古典的な制度史研究については、新たな資料による再検討を余儀なくされているのである。その資料として、筆頭に挙げられるのは文書資料と石刻資料である。森田憲司を中心に、本研究のメンバーは、石刻資料の整理を長年行ってきており、その利用について習熟していることで、本研究を順調に進めることができると考えられる。

## 2. 研究の目的

上記のような状況を踏まえ、中国の華北を主要な研究領域に設定する渡辺健哉・飯山知保と、江南を中心とした検討によって日本における元史像を確立した森田憲司を分担者とし、同じく江南に注目して研究を進める櫻井智美が代表者となって、改めて元代の地方監察制度史や都市制度について考察し、南北各地域の相違について比較検討を行う。元代中国においてどのような地方行政が行われ、それは地域ごとに差異を持つのかどうか、そして、差異があるとすれば、その具体的な相違を探り、それが元代以前に存在した支配王朝の相違など歴史的経緯をどのように反映しているのか、という問題について具体的に考えていく。

その際には、以下のような先行研究の妥当性を再検討する。元代の制度・組織に関する先行研究では、その中に存在する「モンゴル - 漢」もしくは「イスラーム勢力 - 漢」の対立や協調という構図が分析の基本的な視角となってきた。一方、「華北 - 江南」(旧金領 - 旧南宋領)の対比構図は、確かに、「漢人」と「南人」の差異を検討する階級制度や科挙試験の分析において用いられてきた。しかし、モンゴル帝国期の「四等身分制度」(モンゴル人第一主義)などという見方が過去のものとなった今、中国史研究において「華北 - 江南」という南北の対立構図は、制度研究や地域社会の研究において普遍的な視角となっている。むしろ、元代における南北の共通と差違について正面から向き合ってこなかったことこそ大きな問題だと言える。しかし、南北の比較をする以前に、地域ごとの研究の蓄積さえ他代に比して大きくないという事実がある。そこから、地方都市の行政をつかさどった諸機関と、地方と中央政権を結ぶ役割を果たした地方監察官(行御史台・肅政廉訪司)に焦点をあてて、制度的変遷を明らかにすることを第一の目的とする。

さらに、それらの検討を通じて、日本における元朝史研究の新たな起点を構築することが目標である。近年飛躍的に進展したモンゴル帝国史研究の成果を中国史の流れに落とし込むことが、飯山らによって始められている。例えば、人的ネットワークを利用して政界に進出する普遍的な試みについて、推薦に関わった機関と投下領はどのような関係にあったのか、十分に機能しなかった科挙は推薦制度とどのような関係にあったのか、そこにどのような地域差が存在したのか、追究すべき問題が山積みである。そこで、今一度、元の地方制度についての明確な共通認識を作り上げていくことが、次の目的である。

また、それら最新の成果や元朝史研究の現状を共有し、協力して日本の元朝史研究を盛り上げていくために、国内における元朝史研究のベースを作ることも目的の一つとする。

### 3. 研究の方法

本研究では、石刻資料や現地の人々が書き記した地方性の高い資料を多く用いて、地方制度を中央からの視点だけではなく、各地方に即して考えていく。また、刻々と変化する元代の政治状況を見据えて、制度改編や応用の裏にある事実を、監察官に就任した人物の履歴や活動をもとに明らかにする。

3年という研究期間に鑑み、本研究においては、肅政廉訪司をはじめとする監察機関といくつかの地方都市行政組織に注目して、研究を進めた。特に、監察制度の成立時期に焦点を当て、華北と江南の事例を比較したあと、それぞれの変遷の様相を明らかにしていく。その検討材料として石刻所載の官職名の記録と、急速に整備が進む中国古典資料のデータベースを利用する。石刻に表れる人物の官職は様々であるが、肅政廉訪司を初めとする監察官の関与する碑刻の割合は比較的高い。なぜ多くの碑刻に監察官が登場するのか、そして、地域によって監察官の登場割合が違うのはなぜか、その背景を金・南宋からの監察制度の変化を軸に分析していく。

続いて、元初の監察制度設立時に参考とされた金・南宋でそれぞれ行われた「路」ごとの監察体制について振り返る。それらが、元で「道」単位の監察体制と「路」単位の地方官制に変化していく過程を丁寧にたどり、元の初期から中期にかけての具体的な官職名から、元の監察制度の成立と変遷に関する理解を再検討する。

また、森田の調査によれば、都城管理に関わる諸官職についても、石刻資料を用いた分析が可能であるのみならず、地域(都市)ごとの差違が見られることがわかった。石刻資料の中で題名碑に焦点を当て、検討対象を探ることができれば、その検討も進める。同時にメンバー全員が自らの分担内容・地域を中心として考察を進め、年に複数回の会合を開いてそれぞれの検討結果を報告し、数量データと内容分析について比較検討を行う。会合には、協力者として村岡倫と山本明志が参加する。村岡は、モンゴル帝国史からの最新の研究成果に基づいて助言を行う。山本は、江南から華北・チベットへの情報・交通路展開について助言を行う。

共同研究にあたっては、平時より最新の研究状況に関する情報を SNS なども活用して共有するとともに、研究資料の利用環境についても整備することを目指す。以上の検討による成果は、各自が論文として発表する以外に、元朝史の研究者に呼び掛けて、元朝史研究の最前線を紹介・解説する一般書を作成する。

### 4. 研究成果

本研究の最大の目的は、「元朝による中国統治組織の地域比較研究 地方都市制度・監察制度を中心に」という課題のとおり、元代の各地方、とりわけ南北の制度の比較を通じて元朝制度史の研究を進めることであった。中国制度史の中で、あるいは、地方史・社会史の中で、モンゴル帝国・元代が占める位置や役割を明らかにすることを最終目的として、具体的な検討を進めていった。検討の段階的成果として、櫻井は「地方監察制度研究の回顧と展望」の報告を行った。中国においては、新出文書資料を用いて、具体的な地域を設定した研究が進んでいること、ただし、江南を対象としたものは依然として少ないことを改めて認識した。

牛は「儒教碑刻からみた華北の監察制度 山東廉訪司官と御史台官の題名を中心に」において、華北の監察官の多様な活動を、題名碑刻を中心史料として用いて分析した。櫻井の「江南の監察官制と元初の推挙システム」での論証と比較対照することで、元代中国の監察制度の南北比較を進めた。このシンポジウムでは、制度面での宋代との比較や江南行台など行御史台との関係について、参加者から多くの質問・批評を受けた。参加者と議論を重ねる中で、中国史上における元代の監察制度の位置づけについて考察を深めることができた。これら一連の活動を通して、元代の監察官が地方巡察に伴って行う祭祀活動・社会活動や、地方の教育・リクルートに対する監察官の具体的な取り組みが明らかになった。また、監察官には華北出身者が就任する割合が高い点から、官吏任用で科挙が相対化した元代において監察制度が果たした役割の大きさや、その中国制度史上の重要性を指摘した。

渡辺は元朝制度の研究史について考察を進め、内藤湖南の史料分析を積極的に評価した。飯山は、後代におけるキタイ・ジュシェン・モンゴル(遼金元)時代に対する認識を扱い、歴史叙述の材料として江南資料を無意識に用いてきたことを指摘し、華北資料の残存状況とそこに現れたモンゴル時代への認識を分析した。牛はまた、森田氏の「可見元朝石刻拓影目録」から題名碑を抽出して整理した。櫻井の力不足もあり、題名碑を用いた制度史・地方史の研究成果は現時点でまだ公刊できていないが、地域を江南に限定し、具体的な考察を進めているところである。このような具体的な作業を積み重ね、元朝政権が地域をどう把握したのかを書き明らかにしていくことが今後の課題である。また、監察制度の次代への継承についても、現時点で公表に至っていない。今後継続して検討していきたい。

本科研では、上記のような元朝の制度史の新たな知見を提供することに加えて、日本における新たな元史研究のベースを作ることももう一つの目的とした。本科研のメンバーは、1990年代

以降、それぞれのかたちで海外との学術交流を重視して研究を進めてきた。中国の対外開放や交通・通信網の整備という恩恵を受け、この30年ほどの間に学術における国境の壁・言葉の壁は一気に取り払われた、そんな感覚もあった。その中で、海外に対する窓口の意味でも、また、切磋琢磨による研究の振興をも願って、日本の元朝史をゆるやかにでもまとめる組織の必要性を痛感した。本科研では、科研の成果を含めた『元朝の歴史』の出版や第1・2回「元朝史研究会」の開催、ニュースレターの復刊を行い、その基盤を作り上げてきた。SNS上で「日本元史研究者グループ」を作り、若手への啓発も含めた模索も行った。

研究期間中、不幸にもコロナ禍に遭遇し、学術交流には新たな壁が生まれ、「歴史の現場に行く」という手段を2022年春の段階でも回復できていない。中国で出版間近という情報があった石刻資料集の出版も、コロナ禍の影響か、現時点で確認できておらず、本科研の成果にも若干影響した。ただ、本科研終了後も、「元朝史研究会」は、2022年12月に実施する第3回以降、当面、オンライン併用で毎年1回続けていく予定である。世代を越えて日本の参加者間の学術交流を図ることも会の目的の一つであり、海外からの参加も歓迎し、交流を盛んにすることに努めたい。また、『13、14世紀東アジア史料通信』も、元朝史・モンゴル帝国史研究の基盤の一つとして、紙媒体も併せて発行を継続していきたいと考えている。本科研の成果を、このような、日本の元朝史研究の継続的な発展につなげていく所存である。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 渡辺健哉	4. 巻 28
2. 論文標題 歴史資料としての写真 歩く、写す、そして保存する	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 FIELDPLUS	6. 最初と最後の頁 23-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 飯山知保	4. 巻 131-1
2. 論文標題 書評 高橋文治『元好問とその時代』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 71-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 牛瀟	4. 巻 174
2. 論文標題 元代山東の監察官と儒教尊崇 関連碑刻の検討を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 駿台史学	6. 最初と最後の頁 177-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 牛瀟	4. 巻 35
2. 論文標題 元代前期の華北における儒教保護 - 東平学派と曲阜碑刻を中心とする考察 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国 - 社会と文化	6. 最初と最後の頁 115-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牛瀨	4. 巻 25
2. 論文標題 山東孔廟・孟廟の元代地方官題名石刻	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 明大アジア史論集	6. 最初と最後の頁 75-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 櫻井智美	4. 巻 829
2. 論文標題 書評 渡辺健哉 『元大都形成史の研究 首都北京の原型』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史評論	6. 最初と最後の頁 99-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森田憲司	4. 巻 37
2. 論文標題 宋元江南墓誌の検討への課題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 奈良史学	6. 最初と最後の頁 126-155
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渡辺健哉	4. 巻 19
2. 論文標題 元中都研究の現状と課題 - 大都・上都・中都の比較史的考察に向けての覚書	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大阪市立大学東洋史論叢	6. 最初と最後の頁 123-130
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 牛瀟
2. 発表標題 元朝の孔廟祭祀と皇帝権力の変遷 代祀碑の分析を中心として
3. 学会等名 2021年駿台史学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 櫻井智美
2. 発表標題 元代江南提刑按察司的設置
3. 学会等名 色目（回回）人与元代多元社会國際學術研討会暨2019年中国元史研究会年会（國際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iiyama Tomoyasu
2. 発表標題 Eminence by Remembrance: State-Certified Resurgence of the Yuan Non-Han Ancestry in Mid-Late Qing North China and Its Legacy,
3. 学会等名 North China as Part of the Inner Asian System, 10th-15th Centuries (國際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡辺健哉
2. 発表標題 元の大都の形成 首都北京へと続く道
3. 学会等名 2019年度東洋史学研究会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 牛瀟
2. 発表標題 元代の曲阜孔廟にめぐる東平儒士の活動
3. 学会等名 中国社会文化学会大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計8件

1. 著者名 櫻井智美、飯山知保、森田憲司、渡辺健哉ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 322
3. 書名 元朝の歴史 モンゴル帝国期の東ユーラシア	

1. 著者名 古畑徹、渡辺健哉ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 252
3. 書名 高句麗・渤海史の射程 古代東北アジア史研究の新動向	

1. 著者名 染谷智幸、森田憲司ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 文学通信	5. 総ページ数 448
3. 書名 はじめに交流ありき 東アジアの文学と異文化交流	

1. 著者名 小二田章、須江隆、竹内洋介、高井康典行、吉野正史、櫻井智美ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 288
3. 書名 書物のなかの近世国家 東アジア「一統志」の時代	

1. 著者名 平田茂樹、余蔚、久保田和男、苗潤博、山根直生、伊藤一馬、塩卓吾、藤本猛、劉江、郭焯、吉野正史、小林晃、小林隆道、梅村尚樹、邱軼皓、渡辺健哉ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 上海人民出版社	5. 総ページ数 456
3. 書名 史料与場域：遼宋金元史の文献拓展与空間体験	

1. 著者名 千葉正史、大室智人、山根直生、工藤寿晴、飯山知保、渡辺健哉ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 東洋大学アジア文化研究所	5. 総ページ数 76
3. 書名 歴史資料と中国華北地域 農耕・遊牧の交錯とその影響	

1. 著者名 岩尾一史、池田巧、武内紹人、井内真帆、西田愛、山本明志ほか	4. 発行年 2021年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 360
3. 書名 チベットの歴史と社会（上）歴史篇・宗教篇	

1. 著者名 Patricia Buckley Ebrey, Ping Yao,, Cong Ellen Zhang, Iiyama Tomoyasu 他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Seattle: University of Washington Press	5. 総ページ数 287
3. 書名 Chinese Funerary Biographies: An Anthology of Remembered Lives	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究集会「元代史研究会」（植松正先生講演会）の主催（2020年11月7日）</li> <li>・ニュースレター『13、14世紀東アジア史料通信』25号の出版（2020年10月） 森田憲司「再刊のごあいさつ」p.1 村岡倫「モンゴル帝国時代の史料に見える方位の問題 時計回り90度のずれが生じる要因」pp.2-14. 森田憲司「資料紹介：宋高宗書徽宗文集序」pp.15-20.</li> <li>・オンラインワークショップ「元代監察制度研究の現在」の開催（2021年7月18日） 櫻井智美「地方監察制度研究の回顧と展望」 牛瀟「儒教碑刻からみた華北の監察制度 山東廉訪司官と御史台官の題名を中心に」</li> <li>・研究集会「第二回元朝史研究会：『元朝の歴史』合評会及び科研費研究報告会」の主催（2021年12月4日） 第一部『元朝の歴史』合評会（コメント 藤原崇人・小林晃・梨子田喬）執筆者・編者より回答、総括 第二部 科研費研究報告会 渡辺健哉「内藤湖南と元代の公牘」 飯山知保「華北の祖先伝承における元代の記憶」</li> <li>・ニュースレター『13、14世紀東アジア史料通信』26号の出版（2021年10月） 川本正知「書評と紹介：櫻井智美・飯山知保・森田憲司・渡辺健哉『元朝の歴史 モンゴル帝国期の東ユーラシア』pp.1-14 牛瀟「曲阜孔廟の祭器碑に見える江南との関係」pp.15-20</li> <li>・ニュースレター『13、14世紀東アジア史料通信』27号の出版（2022年2月） 櫻井智美「科学研究費基盤研究（C）「元朝による中国統治組織の地域比較研究 地方都市制度・監察制度を中心に」活動報告」pp.1-5 渡辺健哉/飯山知保「研究報告発表要旨」pp.6-7 森田憲司「王晶「關於元代曲阜儒家碑碣文獻命名及立石問題」簡解」pp.8-14</li> </ul>
---

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森田 憲司 (MORITA KENJI) (20131609)	奈良大学・その他部局等・名誉教授  (34603)	
研究分担者	飯山 知保 (IIYAMA TOMOYASU) (20549513)	早稲田大学・文学学術院・教授  (32689)	
研究分担者	渡辺 健哉 (WATANABE KENYA) (60419984)	大阪市立大学・大学院文学研究科・教授  (24402)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	牛 瀟  (NIU XIAO)		
研究協力者	村岡 倫  (MURAOKA HITOSHI)		
研究協力者	山本 明志  (YAMAMOTO MEISHI)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関